編　集　後　記

徳島赤十字病院 消化器外科 富林 敦司

2022年はいよいよ新型コロナウイルス感染症（COVID-19）禍を抜け出して成長回帰が期待されましたが、ロシアによるウクライナ侵攻とともに、エネルギー原材料の価格高騰が家計や企業に襲いかかり、今もまだ大いなる苦難から抜け出せずにいます。医療の現場においても様々な医療機器、物品が不足、欠品となり、またマンパワーの不足も相まって困窮した一年となりました。

しかし、辛いことだけではありませんでした。このような中、国内では新型コロナウイルス感染症に対する経口抗ウイルス薬が承認され、流行による影響を最小限に抑えるべく新たな一歩を踏み出し、明るい兆しも見えてきました。

また、７大会連続７度目のワールドカップ出場となったサッカー日本代表の活躍は日本中を歓喜の渦に包み世界を驚かせるとともに、各国のメディアから称賛の声が寄せられ、日本国民に勇気と希望を与えてくれました。

どんな大きな苦難でも乗り越えられないものはないと信じています。実際に、日常診療においては、スタッフ同士がお互いに声を掛け合い、気遣い、助け合うことによって、救急医療を含めた徳島県の医療体制を支えています。苦難に直面したことにより以前に増して、個々の力を発揮するとともに、お互いの繋がりも大きくなったように感じます。

ここでヴィクトリア朝時代のイギリスの詩人アルフレッド・テニスンの言葉を紹介したいと思います。「希望が人間をつくる。大いなる希望を持て。」

今年度もたくさんの部署、科から新しい知見、貴重な報告例を投稿していただき、今後の診療の一助となる希望が詰まった雑誌になったと思います。